

十日目

ふと、僕は劇場版マクロスFを思い出した。

「そういえば、トウエンティシックスを止血しなくてよかったの？ あんな雑菌だらけの自然環境への免疫なんてまだできてないんじゃないじゃ？」

「やはり、あの巨乳が気になるのですか？」

「気になっているのは君の方だろ？」

僕はジト目で睨んでやると、サーティエイトは「冗談です」と笑った（！）。

「我々は予防注射を何度もブスブスと打たれていますから。有名な病原菌への耐性はあると思いますよ」

「……米軍みたいだね」

「実際、オリジナルはサーティシックス根源三十六体の初等教育担当は米軍海兵隊訓練教官から引き抜いたそうです」

だから、その影響もあるらしい。考えてみれば、彼女たちはどこもなく海兵隊マリーンっぽい。

「しかし、そうすると、有名ではない病原菌が怖いんじゃない？」

「この際、実験台になってもらいましょう。どの道、誰かがいつかはやらねばならない事です」

「でも、あの辺りも温暖化のせい最近じゃ猪が出るし」

「その時は諦めてもらいましょう。私のマスターに手を出した報いですよ」

もしかして怒っている？——と僕は思ったが、そこまで言うなら仕方がない。ただ、「男の僕が言う事じゃないけどさ、経血の臭いなんかはちゃんと処理しないと、熊寄せにすらなりかねないよ？」

「そのためのヴァイタルウェアです。加えて、彼女の生理周期ぐらい、把握しています。問題ありません」

「そう。確認できて、安心できた」

勿論、僕は安心などしていなかったが、苦笑せざるをえなかった。

その時、僕たち二人はたちやま館山の主要観光道を歩いていた。

トウエンティシックス襲撃から考えても、大まかな位置がばれているはずだ。今さら、ここそしても仕方がない。また、ポコポコにされた僕の怪我也気になる。重傷ではないというのが、僕とサーティエイトの共通見解だったが、油断はできない。だから、補給と休養も兼ねて、一度人里に戻ったという訳である。

もつとも、僕としてはサーティエイトに観光を楽しんでもらいたいという下心もあった。欺瞞工作としてだけではない。純粹にいい機会だとも思ったのだ。

実際、サーティエイトは早くもその好奇心をあらわにしていた。

「ところで先程から佐々成政ささなりまさの宣伝がやたらと多いのは何故ですか？」

「え、佐々成政を知っているの？」

僕は驚いた。確かに観光道では佐々成政の幟旗が立ち、商店では関連商品が並んでいる。だが、知識がなければ、それが佐々成政であると認識する事も出来ないだろう。

「馬鹿にしないでください。戦国時代の武将でしょう？」

「そりやそうだけど、ぶっちゃけ全国的な知名度は皆無に近いからさ」

「けれど、この北陸一帯で主に活躍し、城を建てた人物です。県に縁の有名人ですから、予備知識ぐらいあります。現にあなた自身も御存知でしたし」

なるほど、一理ある。とはいえ、地元民でもないのに、こうもつらつら語れるサーティエイトは大したものだと思う。

「ですが、たしかに知名度が高いとは言えません。そんな人物が何故ここではこれほど大々的に喧伝されるのかが、わからないのです」

「そりやあ、ここが佐々成政の『さらさら越え』舞台だったからさ」

「『さらさら越え』？」

「君の言う通り、佐々成政は北陸一帯で活躍し、ここ越中に基盤を築いた。けど、信長の死後、秀吉と対立してね。戦略的に閉じ込められた。東を越前の前田家、西を越後の上杉家に囲まれた。さらに秀吉は当時の日本最大の経済圏だった近畿一帯は手にしている」

「絶体絶命ですか？」

「ああ。ただ、その頃は冬で動き難い。雪もある。大雑把に計算して、二週間は敵が攻めてくることもない。東西は封鎖され、北は海だけど、南は別だ。太平洋側には秀吉と対立している家康がいた」

「しかし、成政は日本海側で、家康は太平洋側でしょう？ 間にはこの三千メートル級の

館山連峰たちやま——ひいては日本アルプスそのものがそびえていますよ」

「ハンニバルやナポレオンも、本家の『アルプス越え』で名を轟かせたろ？」

「佐々成政も日本アルプスを越えた——と？ 真冬に？ 迂回もせず？ 二週間で？」

「正確には往復だね。彼には守るべき領地があったから、大軍を連れたりはしなかった。あくまでも、お忍びで日本アルプスを越えて、家康との同盟を求めに行った。おかげで、元祖の『アルプス越え』みたいに兵士の多くを餓死凍死させる事もなかったよ——これが

世に言う『さらさら越え』ってわけ」

「……なるほど、それで佐々成政がここでは名高いのですね」

「そういう事。負けっぱなしの成政にとっては、秀吉の裏をかけた唯一の策だったと思う。一軍の長が真冬の日本アルプスをほぼ単身徒歩で正面突破なんて、対策のしようもない」
実際のところ、当時既に秀吉の力は圧倒的で、成政と家康の間にある日本アルプスにも支配を及ぼしていた。しかし、それでも、どこから登ってくるかわからぬ者を相手にアルプスを封鎖などできるはずもない。

「それ以前に想像もつきませんよ」

「なるほど、僥倖だ。……やはり有効かな？」

「……あの……まさか……」

「そのために——というわけではないよ。ただ、腹案の一つである事は……」

そこで、サーティエイトの手が僕の口を閉ざした。

僕は自然ドギマギしたが、すぐに「彼女たち」に気付く。

それは大人びた眼鏡っ娘と幼げな巨乳っ娘だった。

——フォーティフォー、ファイティエイト……！

髪は黒く染めているものの、その美貌は隠しようもない。観光客の中にいる【マリオ
ン】二体を僕は確認した。

数瞬遅れて、向こうも気づいたらしい。二人は二人で身構える。

ただ、よく見ると、フォーティフォーの右手がファイティエイトの左手を掴んでいる。

「ここで事を構える気はありません」

フォーティフォーが冷たい声で言う。たしかにこれだけの人目、口封じは面倒だろう。

「我々の目的はトゥエンティシックス姉さまの回収です」

「……それを信じろと？」

「では、考えて下さい。数的優位を確保できていないのに仕掛けると思いませんか？」

たしかに僕を数に入れれば、2対2だ。けど、僕は数に入らないと思う……。それに、
「そのトゥエンティシックスは単独で襲いかかって来たけど？」

「あれはトゥエンティシックス姉さまだから許された特例です。あの方の運動能力ははずば
抜けていましたし……」

フォーティフォーが頬を緩めていた。

昨夜確認したのが、サーティエイトの運動能力はトゥエンティシックスに次ぐという。
あの『水平錐揉み回転両足蹴り』ができるのも、サーティエイトとトゥエンティシックス
ぐらい。逆に、あの重力を無視したような『ニンジャムーヴ』に至ってはトゥエンティ

シックスの専売特許だったらしい。

ただ、フォーティフォーには別の見解があるようだ。

「何より、トゥエンティシックス姉さまは、サーティエイト姉さまに執着されていましたから。事実上の勇み足ですよ」

なるほど、トゥエンティシックスは『拙速』の典型だった。しかし、未睹巧之久也——未だ巧之久しきを睹ざる也——と孫子なら言うだろう。実際、僕は間一髪だった。それを慮れば、辛辣な言い方だ。……どうも、この連中にはこの連中で人間関係があるらしい。

「回収に二人も充てる理由は？」

「理由も何も、元々我々は二人一組ツーマンセル以上が基本です。それが【マリオン】の性質に適していますし。……こんな状況なら、なおのことでしょう？」

僕が横目でサーティエイトを確認すると、彼女は頷いた。たしかに話の整合性はある。トゥエンティシックスの回収は必須だし、刑事なども二人一組ツーマンセルを基本にするという。僕がメッサリーナさんでも同じ指示を下すだろう。

もつとも、このフォーティフォーが表面上は落ち着いているのに対し、隣のファイフティエイトが露骨に睨んできている。意見が割れている可能性も……。

——いや、これがいわゆる『善い警官、悪い警官』というやつか？

僕は弱気を振り切るため、歩みを速める。強引に二人の隣を通り過ぎるつもりだった。サーティエイトもそんな僕に付き従ってくれる。

ただ、すれ違う瞬間、言葉を交わす。

「トゥエンティシックスの携帯端末も発信装置も発見次第に回収させてもらった。あてにしない方がいい」

「私が確認している限り直接投入された人員は9名——内8名はあなたの家に居候させてもらった【マリオン】です」

「その上で、国土地理院発行 1/50000 『剣温泉付近』地図で、左下から、東50センチ、北35センチの松林に放置してある。……GPSなしで僕の概算だから参考程度だけど」

「メッサリーナ姉さまは非殺傷性も含めた弾薬を手配済み。さらに半径十キロ以内の主要交通拠点にはすべて機械的、電子的な監査網があります。背後は山、逃げ場はありません」

「一応、縄で縛ってあるから、急いで回収してあげて。彼女が風邪をひく前に」

「今、投降すれば、一定の配慮がなされるでしょう。それでもよろしいのですね？」

「非モテの対女子免疫の低さを侮るな。……今の僕はこの娘ために尽力あるのみだよ」
僕は勇気を出して、サーティエイトの頭を撫でる。

歳下の【マリオン】二人は、頬を染めるサーティエイトを、黙って見ていた。

「行くよ。サーティエイト——さらさら越えだ」

「イエス、マイllマスター……！」

十一日目

「あー、疲れた。サーティエイト、一休みしよう」

僕は人のいない山道を十キロ歩いた時点で疲れた声を出した。

そして、荷物を下ろすと、一気に身体が軽くなる。この感覚は何度ながら面白い。その場でつい二度三度飛び跳ねる。しかし、サーティエイトが冷たく見つめてきたので、僕は慌てて、荷物を椅子にして腰を下ろした。

だが、サーティエイトは立ったままだ。荷物を降ろそうともしない。

「どうしたの、サーティエイト？ 僕は疲れたんだ。だから、休憩だよ」

僕はそう言ったが、彼女は立ったまま答えた。

「私に気を使うのはやめて下さい。マスター」

昨日から、サーティエイトは僕を管理者マスターと呼び始めていた。

「いや、僕が疲れたんだって……」

「もう騙されません。いいえ、騙された私が愚かでした。マスターは小柄で華奢とはいえ、長距離走破向きの体付きである事は明白だったのに」

「……」

「私だって、歩数で距離を概算する事は出来ません。腕時計もある。大雑把な速度くらいは出せます。……マスターは疲れたと腰を下ろす寸前まで、時速四キロを厳守していた」

……この娘、本当に侮れないな。

繰り返すが、僕は小柄で華奢である。僕の学年五位を信じなかった例の女子生徒などは、課外授業の山歩きの際に『山ではお前のようなガリ勉野郎が真っ先にバテるんだ！』とかわめいていたぐらいだ（なお、僕の中学は間違っても、ガリ勉がいる場所ではなかった。それこそ、マリオンたちのようにガリガリ勉学に励んでいれば、普通は進学校へ行ける。

したがって、底辺中学にいた僕がガリ勉であるはずがない。なのに何故彼女は僕をガリ勉などと言ったのだろうか？）。

しかし、見る者が見れば、わかるらしい。

「この山道で荷物を背負って何十キロも歩いていながら、歩速が落ちていない。まるで、本物の軍人です。そんなあなたが度々休憩を挟むのは私を気遣っているとしたか……」

「本物の軍人なら銃を持っている」僕はサーティエイトの愚考を断ち切る。「僕らの荷物はそれがいい分、軽い。何だかんだで、十キロ程度だ。それに突撃銃アサルトライフルを抱えたりしていいから、両手が空だ。荷物の重さが同じでも、それらをすべて背負って、両腕を歩行補助に専念させられる時と、そうでない時の疲労の違いは君にならわかるだろう？ また夜間も……」

「失言でした。撤回します」

「よろしい」

サーティエイトも味方の過大評価と相手の過小評価を戒めてはくれたようだ。

「疲労は事実だ。君は僕の後を付いてくるだけでいいが、僕は今後の進路を考えなくてはいけない。素人同然な高校生二人で、三千メートル級の山を突破する苦勞、察してくれ」

「……了解しました」

そう言って、サーティエイトは僕をまねて荷物を椅子にして腰を下ろした。

「いい機会だ。今後の進路を説明するよ」

僕は地図を取り出した。これは前々から機会を窺っていた。観光地を離れ、山道を歩き続けた今なら、あらゆる意味で盗み聞かれる心配がない。

「大雑把に言うよ。僕らの現在地は松尾峠、ここから、ザラ峠、五色ヶ原、中ノ瀬、黒部湖を迂回して、北葛岳、鳩峰、八郎落とし、笹原まで行けば、昔の信州だ。ここまで辿り着ければ、いわゆる『自然の脅威』には怯えなくてもいいだろう」

「峠やら岳やら峰やら危なそうな単語ばかりですが……本当に佐々成政とやらもこの道を進んだと？」

「それは因果が逆になっている部分がある。たしかに彼が僕らと同じように、追手を振り切る為にあえて危険な道を通ったのも一因だよ。けれども、成政が通ったから、その後、危険になったとも言える」

「と、言いますと？」

「この辺りは加賀藩おしまりやまに御締山——立ち入り禁止地域に指定されていたんだ。何しろ、この『さらさら越え』の経路はいまだに詳細が怪しい。はっきりしているのは、どうやら、北アルプスには主要街道以外に、権力の手が及ばない『抜け道』が複数あるという事だけ。

——為政者には怖すぎるんで、明治維新まで半ば封鎖されていたってわけ」

これが日本地図最後の空白地点になった一因である。同時に人間の手による整備が殆どされないまま、現代に至った一因でもある。だから、二重三重の意味で盲点なはずだ。

「しかし、そうすると、本当に踏破可能かは……」

「いや、それは心配しないでいい」僕はこれでも漸進的な人間のつもりだ。「この経路は、学術的意義から、伝承をもとに推定し、再現実験で成功したものの一つ。だから、『一定の装備と錬度があれば、踏破可能な合理的な進路』である事は確定している。また、成政が本当にこの進路を選んだかはわからないという事は、仮にアルプス越えの意図を読まれていても、この進路を使うかはわからないという事でもある。それでいて人の目はない……理想的だろ？」

「は、はい」

さらに僕は水分を多めに取る事——凍死する時は水分不足が多い事+日本では飲み水に概ね余裕がある事と、雪が少なくかんじき標かんじきが使えず、谷や川を渡れない事を注意した。意外にもサーティエイトは標かんじきの存在そのものを知らなかった。だから、『谷や川を渡れない』云々で極めて怪訝な顔をする。が、その原理を簡単に説明すると、すぐさまその効能を理解し、最初に標かんじきを考えた者を讃え、自分が標かんじきを使えない事を惜しんだ。

——とはいえ、ここまで理解が早いのはさすがだな。

かんじき標一つをとっても、僕は習うより慣れろといきなり雪山で実物を与えられた。しかし、

今の彼女の様に原理を説明されて結果を演繹するなどできただろうか？

そう考えると、くすぐったい思いにとらわれる。

——これも一種のフランケンシュタインIIコンプレックスか？ たかが、遺伝子操作でいわゆる技術的特異点なんてありえないはずけど……。

脳裏で厨二用語を連想していると、僕の頬が緩んでいたらしい。他にも細々とした事を伝え終わった時、サーティエイトが口を尖らせた。

「……自信満々ですね」

「まさか」僕は妄想を気取られないようにした。「不安にならない理由がある？ むしろ、君が不安がっているだけじゃ？」

「……そうかもしれません。我々はこのような環境を机上でしか経験していませんから」それを聞いて、それこそ安心したよ。少なくともB系列のマリオンは君と同じ条件だ。

不慣れた環境に戸惑ってくれば、基礎能力の差を補えるかもしれない」

「でも、私は悔しいのです……」

「奇遇だね。僕もずっと同じ思いだった」

繰り返すが、基礎能力では【マリオン】の方があらゆる面で上なのだ。僕が悔しくないはずがない。大体、この山中踏破は、僕の得意分野で、サーティエイトの苦手分野なのだ。にもかかわらず、僕の歩速にサーティエイトは完全に追隨しているのだから。

「だけど、所詮は慣れの問題だ。すぐに立場は逆転するよ」

「…：ボーイスカウトでしたか？ 集団生活や野外活動、社会奉仕を通じ、心身の研鑽を図る組織。そういった組織への参加経験が私とマスターの差に繋がっているなら、我々も見習うべきだったのかもしれない」

サーティエイトが悔しさのあまりか、とんでもない事を言い出した。

僕は慌てて頬を引き締める。

「お薦めできないね」

「何故です？」

「第一に、あまり意味がない。少年偵察兵はその名の通り、イギリスの退役将校が少年を偵察兵に使った経験を、教育に転用したものだ。とはいえ、そもそも現行の学校教育自体、国民皆兵時代の軍事訓練を流用したものだ。つまり、元々僕らが受けている教育とかなり重複しているのさ。今更追加したところで効能は薄い」

とりわけ、《マリオンプラン》の教育制度には、現代の学校では乏しくなった軍事訓練の前歴が色濃く残っている。例えば、初対面における敬礼がそうだ。おそらく、一定品質の画一的な人材を育成するという思想が、品質保証された遺伝子の育成という思想と相性が良かったのだろう。

「第二に、実行が困難だ。ボーイスカウトにあって、現行学校教育にない部分と言えば、野外活動と社会奉仕だけど、両方共に自己完結できず、不確定要素が多い。勿論、そこが長所でもあるけど…：安定した人材育成を志向する《マリオンプラン》との相性が悪い」

S系列の話でも思ったが、《マリオンプラン》の遺伝子操作は、稲の遺伝子操作に発想が近い。例えば、強力な農薬は稲そのものを殺してしまう。だが、遺伝子操作で農薬耐性を獲得させれば、稲を生き残らせることができる。同様に強力で画一的な教育はかえって、子供を駄目にしうる。そこで、遺伝的に耐性を獲得させようという訳だ（皮肉な話だが、彼女が自らを例えたコシヒカリも有機栽培に向かず、農薬散布に向いているという特徴がある。さらに言えば、『緑の革命』による『奇跡の小麦』も、同じ方向性だ）。…：しかし、野外活動や社会奉仕はその調整を崩してしまうかもしれない。

「第三に…：まあ、これは僕の個人的な経験に過ぎないけど…：少年偵察兵の倫理は高くなかったよ…：」

「？ 具体的には？」

「窃盗、恐喝、暴行の巣窟だった」

「……それは緊急避難や規律維持に必要だったからですか？」

「自制がきく大人の集団なら、そうだったかもしれないね」

「それで……どうしたのですか？」

「距離を取った」僕はこの一言でサーティエイトが察してくれるのを願った。「元々空気は読めない方だし。周りに合わせるのは苦手だからね」

僕は百姓の家系だ。周りに合わせるよりも周りを合わせたいと思う方なのだ。

「では、マスターは……その……」

「……その暴行の標的になったよ」

「……」

「彼らに言わせれば、僕の協調性のなさやとろさが問題って事らしい。確かに、とろさについては一理ある。僕はお世辞にも俊敏ではなかったし、発育も一人遅れていたからね」

「窃盗や恐喝を行う輩には社会との協調性が欠けてますし、発育不良なら暴力で脅しても意味がないでしょう？」

「ほぼ同じことを言ったら、生意気だという事で眉間を殴られたよ」

当然、僕は泣いたが、彼らは『泣いて赦してもらおうというのが甘い』と罵ってきた。理解不能だった。眉間を殴れば、涙腺が緩むのは当然の生理だ。泣いて欲しくないなら、そも殴らねばよい。

「装備の自己完結性が高いのも、本当はそれが理由。隣にいる連中が信頼できなかった。自分一人でこなさねばならない状況を想定していたってわけ」

サーティエイトは信じられないという顔だった。姉妹の仲が睦ましく、よくも悪くも、強力な相互扶助を前提にしている【マリオン】たちには理解できまい。

「……でも、人間って、結局はそういう生き物じゃないかな？」

破損したテント部品が目映る。あれはもう『共食い』整備するしかない。

比べるのもおこがましいが、太平洋戦争中、追いつめられた日本兵が、最も恐れられたのは敵兵の銃弾ではなく、戦友の飢餓だったという。隙を見れば殺されるかもしれないと、眠れなかった者も多いらしい。僕が日本人だから、知識が旧日本軍に偏るが、似たような事例は世界中であったはずだ。

——なら、この点こそが『理想の女』と現行人類との明確な差異かもしれない……。少なくとも、僕には心底目映くみえる。そんな彼女が質問を重ねる。

「だから……ボイスカウトとやらをやめたのですか？」

「いや、最後まで続けたよ」それがよかったか否かは別だったが「性質の悪い連中が先に

『卒業』したからね。後輩にも性質の悪い連中はいたけど、力関係は逆転していたし」
「逆転？」

「その頃には僕も経験を蓄積済みだったからさ。行動予定を前もって頭の中で組み立てておけば、多少のとりさは補える。発育も遅れ気味だっただけで、体格もそこそこ向上した。連中は悪辣なだけで有能という訳でもない。後天的な努力と工夫がモノを言う長距離踏破では僕の方が上だったし、測量や報告書作成みたいな実務を『僕が気にいらぬなら、手伝わぬ』と脅せば、露骨に媚を売ってくる。僕好みの環境に作り替えるのはそう難しくはなかつた」

「……」

「だから、学ぶところがなかつたと言えば嘘になる。それでも、僕は君と『あいつら』を付き合わせたくはない」

僕も言葉を濁したところは多い。悪辣な連中とは距離を取ったと言ったが、嫌がる者に絡んでくるから、悪辣なのだ。そして、彼らとの最低限の付き合いは避けられなかつたし、その過程で僕も悪辣さを身に付けざるをえなかつた。

連中の一人が怪我をした時、僕は思わず「ざまあみろ」と口にした。

連中の仲間は「お前、マジで最低だな」と僕を罵った。

その罵言に傷付かなかつたと言え、嘘になる、しかし、今思えば、僕の反応もやむをえまい。恒常的に暴力を振るってくる相手に、どう好意を抱けばいいのだ？

いや……結局、人間は環境の生き物なのだろう（僕がこんな考えに至つたのも含めて）。僕は彼らの中で過ごすうちに、彼らと同じ卑しい奴に成り下がりがつあつたのだ。前述の後輩についてもそうだ。暴力だけは回避した。が、『環境整備』のために辛辣な態度を取り続けた事に違ひはない。

中学に親友がいた事が救いだつた。いや、中学では中学で不良生徒に絡まれて苦勞していたが、ボーイスカウトよりはマシだつた。あの親友の理性と品性が支えになってくれたからだ。彼とスパロボ談義に花を咲かせている時間こそが僕を僕でいさせてくれたのだ。しかし、それは彼だからできた事だ。僕にはできない。

——ああ、だから、メツサリーナさんは……。

僕はずっと考えていた事をとうとう口に出す。

「ねえ。サーティエイト、今からでも遅くない。君はメツサリーナさんのところへ戻らぬいか？」

「な、何を言っているのですか？」

「君は僕にかどわかされていただけの被害者で、隙を見て逃げ出し、メツサリーナさんの

ところに戻る——というあらすじ。これなら、君もさほど責任を問われない」

「マスターはどうなるんですか？」

「君がいなければ、どうにでもなるさ。今までどおりだよ」これは本音ではない。誘拐の汚名は正直辛い。

しかし、サーティエイトは僕を余程買ひ被っていたらしい。

「私が足手まといだというのはわかります」彼女は申し訳なさそうに言い、しかし、僕の腕を掴む。「けれど……私が欲しくはないのですか？」

「自惚れるなよ、サーティエイト」以下の台詞が僕の本音か否かは後々まで悩む事になる。

「まさか、僕が君を好いているから、駆け落ちしたとでも思っているのか？」

「違うのですか？」

「君の想いに報いるためだ」

「……それって……」

「士為知己者死、女為説己者容——『士は己を知る者の為に死し、女は己を説ぶ者の為に容かたがらづる』というだろ？ 君が君の美貌を喜ぶ僕のために髪を梳かたがらづったように、僕は僕を評価してくれた君のために駆け落ちしたんだ」

サーティエイトの言葉が乱れる。

「わ、私への愛情ではなく、私の義理で駆け落ちしたと？」

「君は僕のために全てを擲なげってくれた。だから、僕はそれに報うべきと考えた。仮に君が僕の好みから外れた娘であつてもね」

これは嘘ではなかった。僕が好意を抱く女性は、決まって年上、知性と気概と包容力を兼ね備えていた。メツサリーナさんもその一人だ。なんて事はない。僕が子供で、大人の女性に寄りかかりたいだけだ。

勿論、サーティエイトの様な美少女に好かれて嬉しくないわけでもない。ただし、今はそれを口にしようとは思わなかった。

「もう一つ言おうか？ 僕が山に入った本当の理由はね……君が途中で逃げ出すと思つたからだよ」

これは本音だった。恋愛感情など、一時の気の迷いだろうと思つていたのだ。山の中で辛い逃亡生活を数日続ければ、熱も冷め、目を覚ますだろう。少なくとも、メツサリーナさんの下にいる事が幸福で、僕と共にいる事が不幸である事を、正しく認識できるはずと考えていたのだ。

「実際、僕は太平洋側への突破口を示しただけだろ？ 勿論、関東に辿り着けば、追手は撒いたも同然だろう。でも、僕らに生活能力がない。その根本問題を打破する手は打つて

ないし、言ってもいない。 ……そんな手は最初からないんだよ」

これは嘘だった。実はまだ幾つか手はある。しかし、仮にそれが上手くいくとしても、サーティエイトの将来を考えれば、やはりメッサリーナさんとところへ行くのが一番いい。だが、サーティエイトには異論があったらしい。その美しい唇を大きく開き……、

次の瞬間、僕は背中を狙撃された。

「……かはっ……！」

激痛に叫ぶ事もできなかった。サーティエイトは駆け寄ってくれるが、僕は息が苦しく、その場に蹲る。

「処女やら非処女やら下らない事を言っていましたね」

耳に届いた声はたしかにメッサリーナさんのものだった。しかし、久々に聞いた肉声は冷たい怒りに震えていた。

一方、僕は激痛に身悶えながら、混乱に陥っていた。何故、ここがばれたのか、まるでわからない。何らかの手段で盗聴されていたか、発信器があったのか……監視されていたという事はないはずだ。こんな人気ない山林では監視装置はまばらだし、上空からは見えないし、人間が尾行していれば、サーティエイトが気付くはずだ……！

「教えて差し上げましょう。私は安心と信頼の【コンバットフルーツ実戦経験済】——」

そして、メッサリーナさんが雪を踏む音と共に姿を現す。しかし、その身に纏う衣装は以前とは、似て異なるものだった

ヴァイタルスーツ・アサルトモード——それは明らかに戦闘用装備だった。

元々、旧《荒夏》の女性兵士などは広報上の理由で、意図的に色香を振りまくところがあつた。人口比的に全面戦争では分が悪いので、それを回避する手段だったという。

メッサリーナさんを包むヴァイタルスーツ・アサルトモードもその例に漏れず、美貌は露出し、女性の曲線も隠れていない。

それでも首から下は防弾防刃伸縮運動に優れた強化弾性樹脂に覆われている。いつもはジッパーを下げ、丸出し同然だった胸元も、今日はきっちり上まで締めている。さらには手足を炭素結晶装甲で覆い、腰部の左右に軽機関銃？を二丁吊るし、散弾銃を両腕で油断なく構えている。

「——勿論、非処女です」

つまり、メッサリーナさんは僕への敵意で満ちていたのだ。

*** 11日目 ***

……どうも痛みで、数瞬気を失ったらしい。

が、目を覚ました僕の前には相変わらず、完全武装のメッサリーナさんが立っていた。おまけに油断なく、僕を睨みつけている。

「……いや、もっと油断してもいいですよ。僕は所詮非武装な上に、非暴力にならざるを得ないヘナチヨコ小僧なので……」

僕は精一杯頑張って言った。

だが、メッサリーナさんはその美しい まなじり 眦をますます尖らせる。

「サーティエイト、馬鹿な事は考えないように……！ 私の腕は知っているでしょう？ マスターには遠く及びませんがね。この距離なら、ライフリングなしでも余裕ですよ」

—— ライフリング 施条？ 問題は腰だめ撃ちである事ではないのか？

僕はその台詞で重要な事実気付いた。いや、メッサリーナさんが散弾銃を構えていた——という辺りで気付くべきだったのだろう。

そも、ショットガン 散弾銃には暴徒対策銃の異名がある。ライオット 暴徒対策には十分に減速できる非殺傷性のゴム弾が主に使われる。だが、この手の弾は特殊な形状をしているので、発射できるのは ライフリング 螺旋状の溝のない散弾銃ぐらいからだ。

そう、メッサリーナさんが使ったのは、まさにその非殺傷性のゴム弾だったのだ。現に痛んでいる背中を触ってみても、酷いのは内出血であり、外出血はない。

—— 待て。じゃあ、逆に言えば、あの左右に吊るしている軽機関銃っぽいのは……実弾なのか？

僕はゾツとした。軽機関銃に使われる拳銃弾となると、その殆どが対人殺傷に特化した実弾である。例外はあっても希少で、そんなものを今のメッサリーナさんが入手するのは難しい（それだけの組織力があれば、とつくに僕らは捕まっているはずだ）。つまり、今は手加減されたが、あの中には……。

次の瞬間、メッサリーナさんは再び引き金を引いた。

「……！！」

僕の肺に激痛が走る。声を出す事すらままならない。ただ、どこか冷えた頭が、やはり ショットガン 散弾銃の中は非殺傷性のゴム弾で、今もメッサリーナさんは ライオット 暴徒対策銃を撃ただけだと告げていた。ただ、それでも、とにかく痛い。痛いと呼ぶ事すらできない。トウエンティシックスの時とは訳が違う。

「痛いでしょう？ ……トウエンティシックスに性的暴行を加えようとした報いです」

——いや、それは僕じゃなくて、サーティエイトが……！
そう言おうとした。だが、その前に僕の左足へさらなる一撃が加わる。

「……………！！！！」

「見苦しい」

メッサリーナさんは三発目のゴム弾を放った後、そう吐き捨てた。

僕は弁解も反論も出来なかった。当然だろう。こういったゴム弾の威力はしばしばプロボクサーのストレートパンチに喩えられる。それが三発も直撃したのだ。ありとあらゆる意味で僕は涙目である。

しかし、僕はそれでもその涙目で辺りを見渡す。この事態を打破する一手を探す。

だが、視界に入ったのは既に囚われのサーティエイトだった。しかも、サーティエイト一人を拘束するために、【マリオン】が四体も投入されていた。

難しい顔のナインティーンと、苦笑いのトゥエンティスリーが、二人がかりでサーティエイトを押え、ファイフティワンとファイフティツーが二人で仲良くサーティエイトの肢体を蹴っていたのだ。

蹴っていた。

美少女二人が、サーティエイトの乳房を揉み、サーティエイトの股間を弄り、サーティエイトの首筋に舌を這わせていた。

サーティエイトもまた涙目で頬を赤らめていたもの、ただ体を震わせ為す術もない。

「……………！！！！」

「腹立たしいですか？　それが想い人を弄ばれる苦しみです——特と味わいなさい」

メッサリーナさんはやはり冷たく吐き捨てた。そこにある憎悪は計り知れない。

だが、僕の視線とサーティエイトの視線が交わる。

次の瞬間、奇跡が起こった。

「うううあああつつつ！！！！」

サーティエイトが彼女を拘束していた【マリオン】四体を振り解いたのだ。

獣の叫びと共に、力任せに、四体の美少女を放り投げたのだ。

どういう原理かはわからない。火事場の馬鹿力にも程がある。

ただそれでも、サーティエイトは僕のもとへ駆けつけ、その身で僕を庇った。

もはや、メッサリーナさんの声は冷たさよりも、焦りが前に出る。

「どきなさい！　M P B 3 8 ！！！！」

「嫌です！」

「当たり前所が悪ければ、視力や出産機能を失うのですよ！ 下手をすれば、命も……！」

「このマスターの子を孕めないなら、そんなの要りません！」

「っ！」

メツサリーナさんは息をのむ。そりゃそうだ。僕だって、痛みにもんどりうっていないければ、同じく息をのんでいただろう。

だが、メツサリーナさんはわなわなと震えた挙句、瞋恚の眼を僕に向ける。

「よくもまあ……！ この娘をここまで誑し込んだものですね……！！」

……いやいやいや、僕もそんなことまで責任持てないのだが——それを発音できない。非殺傷性といっても、その運動エネルギーは僕を呼吸困難に追いやっていったからだ。

おかげで、状況は混濁を極め、敵意は殺意に変わっていく。

しかし、その時、携帯端末の着信音が鳴った。

「メツサリーナ姉さま……！」

ナインティセブン——最年少マリオンだけあって、どうやら通信役——が声を上げた。

「メツサリーナ姉さま……カンパニーからの指示です」

「何？」メツサリーナさんは苛立ちを隠さない。ちなみに銃口はこちらに向けたままだ。

「その……」

「構いません！ 言いなさない！」

「……富山中道との交渉に応じるとのことです」

「……な、何で!?」

メツサリーナさんは怒鳴り、ナインティセブンはその身を竦める。

「損益分岐点を割った……って事では？」僕のようやく口を開けた。「**デ・ザ・イ・ナ・ー・ベ・ビ・ーの娘がこの僕を誘拐——警察沙汰になれば、二重三重に厄介ですからね**」

「……な、何を……！」

「考えても見て下さい。僕は平凡善良な日本高校生です。それがもう何日も行方不明です。素行不良もなく、無断外泊はおろか、夜間外出すら珍しい健全少年が、行方不明。家族や友人による働きかけもあるでしょう。警察が動かない理由はない。そして、警察が動けば、当然、僕にまとりついてきた金髪碧眼の美少女に行き当たる」

僕は痛みをこらえて立ち上がる。

「居場所を隠さなければいけませんから、ネットに接続は出来ませんでした。ラジオを受信する事は出来ました。高志のニュースもそこで確認できる。まだ僕の事は話題になっていないようですね。しかし、いずれ騒ぐ者が出てくるでしょう」

というか、ローカルネットでは既に騒がれているはずだ。広帯域受信機ワイドバンドレシーバーでは垂れ流しのラジオ電波を拾うのが精一杯だったが……。

「勿論、それらすべての揉み消しも不可能ではない。僕の捕縛とサーティエイトの回収が早期に実現していれば、比較的安値な隠蔽工作も可能だったでしょう。が、それは失敗。今からすべてを揉み消そうとすれば、その費用は嵩む。時が経てば経つ程ね。それなら、**まだ話を通じる僕の要求を受け容れた方がマシ**という判断でしょう？」

そして、サーティエイトをのけて、僕はメツサリーナさんの前が出る。

「ま、マスター……」

サーティエイトがそう咎めたが、僕はなるべく冷徹に断じる。

「さしでがましいぞ、MPB38。僕はメツサリーナさんと話している」

「……イエス。マイllマスター」

サーティエイトは後ろに控え、僕はメツサリーナさんを見つめる。

だが、そのメツサリーナさんは激昂が一向に納まらない。

「皆わかっていない！ 損益分岐点？！ ええ、この一事のみをみれば、赤字でしょう。

しかし、ここで一罰百戒を怠れば、規律の緩みを見過ごすことになります！ それによる長期的な赤字は計り知れない！」

僕は鼻で笑った。

定量化もせずに『長期的』などという言葉を用いるのは、短期で利益を出せない無能の言い訳だ。それがこの聡明な女性にわからないはずがない。結局、それがわからなくなるほど、サーティエイトが愛おしいのだろう。

それに、

「カンパニーとやらは議論ではなく、命令をしているのでしよう」

メツサリーナさんは僕の右眼に銃口を突きつけた。

「そうやって、理詰めあげつらで他人を論うから、友達もいなければ、虐められもするんです！」

「そして、あなたは引き金を引き、命令伝達が間に合わなかったと報告する事もできる」

「……なら！」

「けど、撃ちません」

「根拠は！？」

「あなたは規律を重んじる。あなたも【マリオン】ですから。……だから、好きになったんですよ」

ボーイスカウト時代、僕は飲酒や喫煙を奨めてくる先輩を軽蔑していた。山中踏破で、

咽喉の渇きに負け、自動販売機でジュースを買う先輩を侮蔑していた。前者は違法だし、後者は訓練の主旨に反するからだ。

とはいえ、窃盗、恐喝、暴行と違い、具体的な被害者がいるわけではない。特に飲酒や喫煙を仲間内でやっていたのは、軽度な違法経験を共有する事で、一体感を高める目的があったのだろう。実際、先輩に煙草を薦められたことがある。

けれど、僕はそれを拒んだ。

先輩の一人から、妙に静かな声で、「ふりだけでもできないか？」と言われた事もある、僕は手を伸ばしかけたが、結局は首を振った。その先輩は「そうか。残念だ」と言った。本当に残念そうな眼をしていた。翌日から僕への暴行は一層酷くなった。

しなかったのではない。できなかったのだ。周りの有象無象からは「ビビリ」だの「腰抜け」だのの挑発が飛び交ったが、それでも、できなかったのだ。

何故なら——いや、というより、何よりも——僕は人に平伏すより、噛み付きたくなる性分なのだ。

「……………っ！」

メッサリーナさんは言葉にならない逡巡の末、散弾銃を投げ捨てた。

僕はホッと一息をついた。周囲の空気が急激に弛緩するのを感じる。

あるいはそれがB系列【マリオン】の総意だったのかもしれない。

しかし、メッサリーナさんの憎悪が揺らぐ事はなかった。

「これは私的な要望なのですが……歯を食いしばってくれませんか？」

「え？ それって？」

「カンパニーは約束を守りますし、私はその指示に従います」

「だ、だったら……」

「しかし、私個人の感情は別にあるのです」

「は？」

次の瞬間、僕は見事にぶん殴られた。

メッサリーナさんは手足も長くしなやかで、その長身瘦躯は凄まじい発条パネを成していた。結果、僕の右頬にゴム弾並みの一撃がめり込んだのだ。メッサリーナさんの拳はそれこそプロボクサーのストレートパンチに比肩し、僕は大地を転がる羽目になった。

「今日はこの位にしておきますね」

「……こ、これで終わりじゃないんですか？」

「妹を取られた姉心の傷——容易く癒されるわけがないでしょう？」

メッサリーナさんは僕に背を向けた。が、よく見ると肩を震わせ、ひくひくとしていた。

子供のように泣いているのだ——と気付いたのは、他の【マリオン】達が駆け寄り、慰め始めたからだ。

——いや、かわいいそうなのは、僕の方じゃないのか？

僕が思わずそう言いかけたが、サーティエイトだけは僕に駆け寄って慰めてくれたので、とりあえず我慢した。

十二日目

さて、何故、僕らは居場所を特定されたか？

何でもメッサリーナさんは館山連峰で僕らを一時完全に見失ったらしい。だから、恥を忍んで、マスター（勿論、僕ではなく、『メッサリーナさんのマスター』）に地図を見せたそう。その上でわかっていた僕の行動を伝えたところ、そのマスターさんは『アルプス越え』の意図を読み取り、さらに『その場合に自分なら選ぶ進路』を語ったという。で、そこに網を張っていたらドンピシャだったらしい。

元が『一定な装備と錬度があれば、踏破可能な合理的な進路』だ。必然的に収斂する。それ故に予測し易い。どのカーナビソフトを使っても、同じ条件なら、似た進路が導き出される。勿論、山道や獣道の場合、カーナビソフトは役に立たない。が、同じ人間ならば、話は別——と言う事らしい。

メッサリーナさんのマスターさんはアラブ人のおっさんで、当然、佐々成政もさらさら越えも知らなかった。ただそれでも地理的必然はあったのだろう。

帰りの箱車ワゴンボックスカーの中、説明を受けた僕は肩を落とさざるを得なかった。

結局、僕は≪マリオンプラン≫ではなく、人間の——経験を積んだ大人の——力に……。 「負けた——なんて、思わないで下さいね」しかし、メッサリーナさんは運転しながら、別の見解を述べた。「生きて帰れただけでも、最低成功ミニマム・サクセスです。その上、その娘との関係を認めさせたのだから、目標達成ミッション・サクセスですよ」

「……そんなに僕の命は危なかったんですか……？」

「相手が私だから、交渉成立しましたけどね、世の中には道理も良識も通じないイカれた連中がいるんです。仮に、これが人斬りSAMURAIガールなら、通信装置は『故障』して、君は一太刀で斬り捨てられ、サーティエイトの肉体は散々玩具にされた挙句、罅り殺しにされたでしょう」

「は……はい」

——ていうか、人斬りSAMURAIガールって……？

僕が当然の疑念に身を震わせていると、メツサリーナさんはさらに言葉を重ねる。

「……で、【愛称^{ペットネーム}】は決めたのですか？」

「は？」

「どうも、まだのようですね。【愛称^{ペットネーム}】は我々マリオンの伝統、マスターが決まったら、そのマスターに【愛称^{ペットネーム}】を決めてもらうのです。私もそうして『メツサリーナ』になりました……」

「なるほど」

僕は興味深い風習だなあと感心していた。が、車内にいるマリオン×9体から、「こんな奴がサーティエイトのマスター……!？」という気焰があがったので、慌てて、車外へと目をそらす。

館山連峰から高志市街に向かう田舎道だ。当然、車外には水田が広がっていた。そういえば、そろそろ田植えの時期だった。

「じゃあ、《稲穂^{イナホ}》で登録」

「了解。MPB38の【愛称^{ペットネーム}】は『稲穂^{イナホ}・マリオン』に決定しました」

今度はサーティエイト改め稲穂^{イナホ}もエラー判定を出さなかった。

メツサリーナさんは「この金髪を稲の穂に喩えたのですか？」と訊ねてきたので、僕は「それもあります」と答えた。たしかに、彼女の金髪は三つ編みお下げにしてもなお長い。その豪華さは稲穂に喩えるに相応しい。

けれど、本当の理由は僕と彼女のささやかな秘密だ。

十三日目（最終日）

翌日、僕達二人で登校しようとする、B系列8名が制服姿でずらっとあらわれた。

「で、なんで、この娘達もいるの？」

「……どうやら、監視のようです」

MPB38稲穂^{イナホ}・マリオンが僕の隣で説明する。

つまり、カンパニーは僕を完全に認めたわけではないということらしい。

一応、僕の提示した『僕とサーティエイトを高校卒業までは一緒に居させてもらう』という条件は受け容れてもらえた。だが、これもカンパニー内では意見が割れている。具体的にはこの条件を認める勢力（マスター派）と認めない勢力（ドクター派）があるらしい。

「前者は、この際、サーティエイトと『自然交配』させて、混血児を産ませる事で、我々【マリオン】の社会的地位を固めたいようなのですが」とニンティーン。

「後者は、勿論熱烈反対中」とフォーティフォー。

「二人の同居がやむなしなら、せめて、サーティエイトがキズモノにされるのを防ぐ対抗勢力の配置を要求した」とトウエンティスリー。

「それがあたしたち。不純な行為に及ぼうというなら邪魔する」とフィフティエイト。

「わ、私たちだけではなく、メツサリーナ姉さまも、時々監視に来るそうです」とナインティセブン。

「よかったねー。ハーレムだよー」とフィフティワン。

「いっぱい、デレデレしてねー」とフィフティツー。

「それでサーティエイトに愛想をつかさねない……！」とトウエンティシックス。

「……………」

僕の家が金髪碧眼姉妹ハーレムで、そして、僕への敵意に満ちていた。

「了」